
崇り君

ふえろえもん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

崇り君

【Nコード】

N1556B

【作者名】

ふえろえもん

【あらすじ】

ふえろえもんにはこんな経験があります。ふえろえもんがまだ小学生の頃、友人から借りたゲームのカセットを無くしてしまい、親に糞怒られながら弁償したんです。そして数年後、その友人とラーメン屋さんで久しぶりに会った時、友人は言いました。「弁償してもらったゲームのカセット、前押し入れから二つ出て来たんだ。実は無くしたの俺だったみたいw」…それを聞いたふえろえもんは、目の前に用意されているラーメンを友人に目から無理矢理食べさせようとしていました。無理だとわかっていても止められませんでし

た。人間には狂気が潜んでいるんです！そして本編の崇り君も、狂気に支配されたその一人なのです…

第一話 背後

今日も太陽が登り、朝が来て、いつもと同じAM7:30に目覚ましが鳴り、僕は目を覚ました。

着替えて朝食を食べて家を出て、いつもの道を自転車を通り校門をくぐって、下駄箱で靴を履き替え階段を登り、20m程廊下を歩くいつもの教室に着く。

ここまではいつもと変わらない平和な一日の始まり。

しかし、教室に入り窓際の自分の席に着席して一息ついた時、友人の芝が廊下を息を切らしながら走って来た。

そして教室に入るとすぐに僕の机に近付いてきて、両手をバチンと机に打ち付けて芝は呟いた。

「ヒデ！転校生だ…！」

夏休みも近いこの中途半端な時期に、しがない普通の県立高校に転校生。

平和な日常が今まさに崩されようとしているなど、その時の僕には知るよしもなかった。

崇り君

朝っぱらから教室はざわついていた。

朝から最強にウザいテンションで教室中に転校生情報を喋りまくる芝に、クラスのみんなも興味津津と話を聞いている。質問なんかをしている。

話によると、

転校生は女子

小柄なかわいい雰囲気な後ろ姿だった

髪は黒くて長かった

いい香りがした

と、端的にまとめれば期待できる雰囲気だった、とそんな感じだった。

予鈴が鳴っても興奮覚め遣らぬ教室に、担任の岡林が入ってきた。

「うおーい、着席しろーい」

気の抜けた岡林の声にみんな従い席に着く。

岡林が淡々と連絡事項を話している間にも、クラスのみんな（特に男）はかなりそわそわして目が血走っていた。

『早く転校生を出せ、殺すぞ』

と言わんばかりの気迫を知ってか知らずか岡林はダラダラと本題に入らず、連絡事項を話すのに一生懸命になっていた。

とりあえず連絡事項も全て話し終えて一息ついたところで、岡林はやつと本題に入った。

「あー、後知ってる奴もいると思うが、このクラスに一人転校生が転入する事になった」

『うおおー!!』

芝、以下何名のアホ男子はテンション上がりまくりで声を上げた。

「こらこら、静かに」

岡林はそう言って教室の扉を開けた。

「はい、入って入って」

岡林に急かされながら廊下から転校生は遠慮がちに教室に入ってきた。

多分クラス中のみんながそう思っただろう。

予想以上にかわいい。

転校生は黒板の中央辺りまで来ると、こっちを向いて少し苦笑いをした。

またクラスみんなが同じ事を思っただろう。

「あの、多田梨華です。

ちよつと中途半端な時期なんですが、親の仕事の都合で転校してきました。

よろしくお願いします。」

手短に自己紹介して、転校生、多田梨華はペコリと頭を下げた。

「ハイこちらこそ!!」

芝は立ち上がって元気よく答えた。

まったくもってうつとおしいw

改めて見ると、多田梨華は端正な顔立ちをしていた。

小柄で色素の薄い肌と少し栗色がかった髪が、彼女をよりいっそう
儚げな存在にしている。

「こらこら、芝！いちいち立ち上がらんでいい！」

岡林に諭されても芝は興奮しっぱなしだった。

「それじゃあ多田、とりあえず後ろの空いてる席に座りなさい。ま
た後日席替えするからな」

岡林に言われた通り、後ろの席に向かって多田梨華は歩き出した。
物珍しそうに辺りを見回しながら一番後ろの廊下側の席に多田梨華
は着席した。

ちょうど僕の席の反対側だ。

ぼーっと多田梨華を眺めていると、ふいに目が合った。

多田梨華はその途端、さっきの苦笑いとは全く違う表情で僕に微笑
んだ。

心臓が跳ね上がり、顔に血が集まってくるのを感じた僕は、ゆっく
りと自然を装って窓の外に視線を向けた。

それがきっかけだったんだろう。

僕が天然のプレイボーイであつたのなら、また違う未来が待ち望ん
でいたのかもしれない。

今となつては、

まあ、どうしようもないけども。

ただ
切に思う

失敗した、
と。

潜んで

『いじめカッコ悪い』

昔そんな風に教わったな。なんて思いながら、僕は立ち尽くしていた。

朝起きて学校に着いた所まではいつもと変わらない日常だったのだが、下駄箱の中にあるはずのマイスリッパがなくなっていた。その代わりに

「…なんだこりゃ？」

中には下駄箱ではあまり見慣れないものが入っていた。

「…茄子だな」

いつの間にか現れた芝が僕の後ろからヌツと覗き込みながら呟いた。

「…茄子だよな？」

「ああ、それもおつきくてとってもいい茄子だ。
おっと！触るなよ！

誰かの使用済みかもしれないからな！」

朝から下ネタ全開の芝は絶好調。

とてつもなくウザい。

「お前がやったんだよな？」

僕は冷たく芝に詰め寄った。

「ちょっとちよつとマテ！俺じゃない！信じてくれ！こんな事やって
も俺に何の得があるんだ！？又レギ又だ！」

「無意味だからこそお前が怪しいんだよ！

クリスマスにう〇こ爆弾とか言つて無意味な大量破壊兵器造ろうと
して失敗（被弾）するようなやつだからな！
白状しろっ！」

ちなみにクリスマス僕も強制参加させられました。

「ちつちげーよ！マジで俺じゃねーよ！

っ！かそれは言うなってー！」

全身で否定を表現しようとしているのか、力みまくっている芝を無
視して僕は来客用のスリッパを借りに職員室に向かった。

その時まで僕は芝が犯人だと信じて疑わなかった。

芝の日頃の行動を思い起せば、それがどんなに自然な事か。

そして何事もなく学生の一日は終わり、翌日。

下駄箱にマイスリッパが帰って来ていた。

しかし

一限目、現国の授業で僕は異変に気付いた。

教科書を捲った瞬間目に飛び込んできたのは

一限目終わりのチャイムとともに、僕は芝にまた詰め寄った。

「…これはエロ本の切り抜きだな」

目の前に置かれた僕の元教科書だった物を、芝はまじまじと覗き込んでいた。

「…おい」

「…ヒデ、たまってるのは分かるがこれはヒクぞ」

「…おい」

怒りを込めて芝を見据える。

「はい？何か？」

「何がはい？何か？だ！」

またおまいだろが！
こっちが引いたわ！」

そう言った瞬間、芝はえゝ！？うそゝん！？みたいな顔をしてきた。

「キモい顔するな！マジで勘弁してくれ！」
全力の抗議をする僕に、芝も全力で返してきた。

「勘弁してくれも何も俺はやってねーっ！
昨日も今日も俺は無実だーっ！
弁護士を呼べーっ！」

その絶叫にクラス中の視線が僕達に集中した。

「…芝さん、もう少しトーン下げて喋ろうか」

僕の常識的な訴えを見事にスルーしつつ、芝は続ける。

「俺じゃないかな！認めてくれるまでおっきい声出し続けてやる
！」

クラス中がしんとした。

「…じゃあ誰がこんなしょうもない事するんだ？」

「…っつ知るか！」

芝は力いっぱい言い放った。

まあ、芝はアホだが基本的に嘘は着かない。
ここまで芝が否定するのなら違っだろう。

なら誰がこんなしょうもないイタズラをするのだろうか？

僕が黙っていると、芝が普通のトーンで話しかけてきた。

「…ヒデ！すごい事に気付いたぞ！」

例の教科書を手に取り、真剣な面持ちで僕に言い放つ。

「このエロ本の切り抜き。
全部潮吹きシーンだ…！」

「っやっぱりお前だろが！」

思わず叫んでいた。

この時まで僕は、後から大変な事になるなんて思ってもみなかった。

今の自分がもし、過去の自分に一言言えるのなら

『頑張つて下さい!』

この一言に尽きるだろう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1556b/>

崇り君

2010年12月9日14時25分発行